

## 式辞

太陽の日差しも日に日に暖くなり、春の訪れを感じさせる頃となりました。

ただいま、1864名の皆さまに学位記を授与させていただきました。このたび、ご卒業される皆さまに、心からのお祝いを申し上げます。ご卒業おめでとうございます。

また、本式典にご出席されているご家族の皆さま、そして関係の皆様方にお慶びを申し上げますとともに、本学に対する日頃からのご理解・ご支援に、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

さて、本日の式典には愛媛県の各界を代表する方々、愛媛大学経営協議会の委員の方々、そして愛媛大学にゆかりの深い先輩諸氏に来賓としてご臨席を賜っております。ご多用の中をご参列いただき、まことにありがとうございます。厚く御礼を申し上げます。

「大学卒業」というイベントは、人生における大きな節目であり、次なる目標へと向かう新たな船出でもあります。卒業される皆さまの多くは、「就職」という形で大学を巣立っていくこととなりますが、今後は社会の荒波の中を、「流れに乗り」、そして「流れを読みつつ」、自らの力で進路を切り開いて行かなければなりません。在学中に修得した知識や技能、そして思考・判断力をさらに磨き上げ、自身の目標に向かって邁進してください。

また、卒業生のうち、352名の皆さまは大学院へと進学し、勉学活動を続けることとなりますが、大学院においては、「研究」という形で、これまでよりも一層深いレベルの知識と技術の修得が求められます。探求と学びの姿勢を常に忘れず、「知の力」をさらに向上させてください。

平成24年、愛媛大学は「本学の学生が卒業時に身につけていることが期待される能力」として「愛大学生コンピテンシー」を制定し、以後、学生教育の重要な指針としています。この「コンピテンシー」は、「知識と技能」、「論理的思考力」、「コミュニケーション力」、「自立力」、「協働力」の5つの能力から成り、いわゆる社会人基礎力にも相通ずるものです。近年、文部科学省は「これからの社会に必要な人材」の育成を目指した「高大接続システム改革」の中核に、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」、そして「主体性・多様性・協働性」という「学力の3要素」を据えましたが、「愛大学生コンピテンシー」はまさにその先取りです。特に、準正課教育や正課外活動に積極的に係わってきた皆さまにはそうした能力が自然と身につけていますので、どうか自信を持って旅立ってください。

とは言え、社会に出れば多くの試練が皆さまを待ち受けているでしょう。近年、社会的、文化的、経済的活動など様々な分野におけるグローバル化への反動からか、大国を中心として、「自国第一主義」を掲げる新たなナショナリズムの台頭が見られます。米国でのトランプ大統領の当選、イギリスのEU離脱などはその象徴的な現象でしょう。大義名分は国

際協調よりも国益追求であり、消えていたボーダーが復活するのか、今後の社会動向はいたって不透明、流動的です。

そのような中、これから大海へ乗り出そうとする皆さまに何が必要なのでしょう？ 昨年度、私は、愛大学生コンピテンシーにプラスすべき「6つ目の能力」として、「俯瞰力：大きな視点から物事を冷静に見つめる能力」の必要性を、今はやりの「ドローン」を例にお話させていただきました。今回は、眼科医であることにちなみ、7つ目の能力としての「両眼視」の重要性についてお話いたします。

大昔、われわれヒトの祖先は、天敵から逃れ果実を食するために樹上で生活することを選択しました。結果として、木々の間を飛び回ることが必要となり、これに合わせてものの遠近感を掴みやすい方向へと目と脳の構造は進化していきました。

鳥以下の下等動物では目は顔の横についていて、右目の神経は左の脳へ、左目の神経は右の脳へと完全交叉しています。このため、両眼の視野の重なりはありませんが、その代わりに 360 度に及ぶパノラマビューを獲得し、天敵の襲撃に備えています。

他方、ヒトでは目は顔の前方についていて、左右の目の視野が 124 度にもわたって重なっています。ただ、同じものを見ている場合、左右の目の角度に違いがあるため、その映像はまったく同じものではなく、実際には「2つの映像」が得られています。実際、われわれが左右の目で、「異なった映像」を見ていることは簡単に確認できます。正面に指を一本立て、それを左右の目で交互に見比べてみてください。指の位置が少し移動して見えるはずです。

この「2つの異なった映像」は脳の持つ「両眼視機能」の働きによってプロセスされ、「立体感」や「遠近感」を持った「1つの映像」へと変換されます。これがヒトを含む哺乳類が獲得した「立体視」と呼ばれる高次の視機能です。このように「視差」と呼ばれる左右の目の視線の違いによって立体視が生みだされ、奥行きを持った質の高い見え方を享受できるのです。

ヒトは視野の広さ（俯瞰力）を半分以上捨て去り、この立体視を選択しました。この機能が如何に優れたものであったかについては、その後の人類の隆盛の歴史が雄弁に語っているのではないかと思います。

このような形で、一つのことを違う角度から眺め、評価することは、物事を的確に判断していく上でとても重要です。物事には、「楽観主義」と「悲観主義」とか、「保守」と「革新」とか、「男らしさ」と「女らしさ」といった二面性が必ず存在していますが、誰の頭の中にもこれに対応した対立センサーが備わっていて、そのバランスの中で様々な判断を下しています。言い換えれば、このバランスの違いが人間の個性であるということになりま

す。

さて、こうした対立軸のうち、世の中の出来事によく関わっているものに、「道理」と「利益」があります。人間の普遍の行動モラルが道理の「理」、要は物事の筋道ですが、他方、人間の世界にある最大の魅力であり、かつ思考バイアスの源が利益の「利」です。この「利」を求めて人間は血迷い、モラルを失うことさえあります。利益の「利」で道理の「理」を覆い隠しても、うまく行くのは一時的であり、早晚、崩壊することは幾多の歴史が如実に証明していますが、そうとは知りつつ、人間は都合のいい「理屈」を考え出し、自己の「利益」を優先してしまうのです。

道理の理、利益の利、どちらも「り」なのですが、この二つの「り」センサーは人間の中で常に揺れ動いていて、皆さまの中にも存在しています。私の好きな吉田松陰の言葉に、「君子は、何事に臨んでも、それが道理に合っているか否かと考えて、その上で行動する。小人は、何事に臨んでも、それが利益になるか否かと考えて、その上で行動する。」とあります。皆さまには、是非、二つの「り」センサーをバランスよく働かせる中で、道理の「理」が利益の「利」を制する、質の高い人生を歩まれてください。

最後になりましたが、愛大学生コンピテンシーを身につけて卒業されていく皆さまが、それぞれの分野で素晴らしい成果をあげられることを心より期待し、私からのなむけの言葉といたします。

平成 29 年 3 月 24 日

国立大学法人愛媛大学長 大橋裕一